

## オリンピックと教育 －オリンピック競技大会誕生の背景とその今日的意義－

### Olympics and Education : Background of the Revival of the Olympic Games and the Relevant Significance

田原 淳子

Junko TAHARA

#### はじめに

オリンピックのイメージとは、4年に一度繰り広げられる華やかなスポーツの世界の祭典であり、トップアスリートのメダル争いに各国民が一喜一憂するといったものであろうか。人々はひたむきな選手たちの明暗や奇跡のドラマに心を動かされる。

だが、オリンピックはそもそも何のために行なわれているのだろうか。世界のトップアスリートをランク付けするためなのか、どこの国が多くのメダルを獲得するメダル大国なのかを見極めるためなのか、開催都市を世界に宣伝するためなのか、あるいはオリンピック効果で地域開発をするためなのか…。その答えについて書かれているのが、国際オリンピック委員会（IOC）が定めた『オリンピック憲章』の「オリंपイズムの根本原則」である。オリंपイズム（Olympism）とはオリンピックの理念のことである。オリンピックのテレビ報道を見ていると、アナウンサーから「平和の祭典」とか「人種、宗教、政治を超えた」といった言葉が聞かれるのも、この根本原則によるものであろう。

そこで、この小論では、「オリंपイズムの根本原

則」に関連づけながら、オリンピックの始まりやオリンピック競技大会の位置づけ、オリンピックが目指していることなどについて述べたいと思う。

#### 1. オリंपイズムはなぜ復興されたのか

オリンピック競技大会は、1896年第1回アテネ大会に始まる。別名「近代オリンピック」とも言う。「古代オリンピック」と区別するためである。古代オリンピックは、古代にギリシアのオリंपピアで行われていたオリंपピア競技祭のことを言い、紀元前776年から紀元後393年まで4年に一度のサイクルで開催されていたことが確認されている。古代ギリシアでは4年間を一つの時間の単位としてオリंपピアースと呼び、その第1年目に競技会を開催していた。これが今日のオリンピック競技大会（英語の正式名ではオリंपピアード、Olympiad）の表記につながっているとされる。古代オリンピックの歴史はおよそ1200年。近代オリンピックの歴史よりも遥かに長い。ギリシア神話に登場する全能の神ゼウスを祀る大会として行われていた。

古代オリンピックの歴史は、当時の紀行文や遺跡の研究などから多くが明らかにされてきている

が、現代へのメッセージ性という意味では、エケケイリアと呼ばれる休戦制度 (Olympic Truce) が確立していたこと、ギリシア人がスポーツの理想としたカロカガティア (美にして善)、スポーツと芸術の融合、を特に強調しておきたい。

古代オリンピックは、ローマ帝国によるギリシアの征服により神殿破壊令が出されるなどして、その制度を維持できなくなり、終焉を迎える。その後、地殻変動などにより土砂に埋もれたオリンピアは長く人々の目に触れることなく中世の時代を過ぎる。およそ15世紀ものときを経て、再びその姿を世に現し始めたのは、1766年リチャード・チャンドラー率いる調査団の手によってである。

18世紀後半のヨーロッパは、古代ギリシア文化への関心が高まった時代であった。その後、オリンピアの発掘は1875年から現在に至るまで組織的に行われている (桜井ほか、2004)。近代オリンピックの創始者となるピエール・ド・クーベルタン (Pierre de Coubertin, 1863~1937) は、この発掘ブームの時代に生を受けた。

こうした時代にあって、古代に行われていたオリンピア競技祭のようなスポーツ大会を復活させようと思いつき、実際に企てた例は世界のあちこちにみられた。オリンピアのお膝元のギリシャはもとより、アメリカ、イギリス、フランス、スウェーデン、ドイツにおいて確認されている。ただ、これらの中で、クーベルタン (フランス) が起こした大会だけが国際的な規模で行われ、今日に継承されている。

## 2. 創始者クーベルタンの願い

### (1) スポーツによる人間の調和のとれた発達

クーベルタンは貴族の出身で、子ども時代に普仏戦争 (1870~1871) を経験する。パリのイエズス会系のコレージュ・サンティグナス (聖イグナチウス校) で中等教育を受け、19世紀フランス中等教育の伝統となっていたギリシア・ラテン語学習を中核とする古典語教育の課程を修めた。こ

の古典的教養と少年時代に過ごしたミルヴィルでの性格形成がオリンピック競技大会復興の発想の原点であるといわれている (清水、1989)。その後、イギリスの教育について記述された、テーヌの『イギリス・ノート』やヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』に触発されて、クーベルタンは1883年イギリスに旅立つ。パブリック・スクールの校長であったトーマス・アーノルドの教育に心酔したクーベルタンは、イギリスの青年を鍛えているのは「競技精神 (道徳的筋肉活動)」であり、スポーツ競技こそが青年を教育するにふさわしい活動であるという確信を得る。スポーツが社会性の育成や身体と知性と精神のバランスのとれた発達に重要な役割を果たしていることに深い感銘を受けたのである。その後、フレデリック・ルプレという社会学者の研究手法や社会観、その社会改良運動への応用を学び、スポーツによる人間陶冶と社会改革という二つの思想が、クーベルタンの中で独自のオリンピック競技大会の復興という着想を生む。

『オリンピック憲章』は、スポーツによる教育がオリンピックの思想の一つの重要な柱であることを明示している。

「オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進することにある。」(オリンピズムの根本原則 2)

### (2) 世界平和

スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることが、平和な社会 (世界) を築くことにつながるというクーベルタンの平和思想は、彼が戦争の時代を過ごしたことと無関係ではないであろう。しかし、それ以上に、古代オリンピックがその長い歴史を通じて休戦の制度をほぼ維持していたという歴史的な意味と深い関係がある。古代ギリシアでは、大勢の人々が移動する大会の前後を含む期間は、エリス (オリンピアを有する地) に武器を持ち込まないことや死刑執行の禁止など流血を

避ける協定が、都市国家ポリスの間で結ばれていた。それが一時的なものであれ、ギリシアの人々は選手や旅人（観客）の安全を確保し、平和の維持に努めていた。

クーベルタンにとって、オリンピック競技大会は「人類の永遠の進歩発展を記念しておこなわれる人間の青春（青年－筆者）の4ヵ年祭を意味している」（クーベルタン、p.204）。そして、近代における「休戦」の意味を次のように説明している。「この若々しい成人を祝福するのに、一定の規則的な間隔を置いて、その時一時すべての争い、意見の相違、不和を止めることを宣言する。…自己を抑えることができ、また全体が自分を正当だといって利害や権力欲や所有欲に走る時、これに停止を要求するほど強い意志をもつ人は、ほんとうに強い人であります。戦争の真っ最中に能力の試合を公正に騎士的にやるため、敵味方両軍が一時戦闘を中止するなら、これは甚だ結構なことでありましょう。」（クーベルタン、p.205）

クーベルタンが、平和を構築するための一つの可能性として重視していたのが、大会を国際競技大会にすることであった。肌の色や言葉、文化が異なる青年たちが一堂に会して、スポーツで競い合う。国際ルールを周知していれば、共に競技をし、お互いの理解と友情を育むのに言葉のちがいは大きな壁ではない。スポーツによる国際交流は、異国への偏見を減らし、誤解を解くかもしれない。国際交流を経験した選手たちは、自国でそれを仲間や人々に伝えるであろう。スポーツで友情を築いた選手たちは、互いの国と戦争をすることを嫌うにちがいない。

こうしたスポーツを通じた国際交流による世界平和への貢献とは別に、クーベルタンが目にしたことがある。それは、オリンピック競技大会を当時ではまだ珍しかった国際大会にすることによって、世界の注目を浴び、それがスポーツの大衆化につながると考えたことである。

### (3) スポーツの普及

19世紀末から20世紀初頭のスポーツは、主に

身分が高く経済的にも時間的にも恵まれた白人男性の文化であった。当時のスポーツ界の重要な関心事の一つは、スポーツ界からいかにしてプロフェッショナル（身体活動によって収入を得ている肉体労働者）を排除し、アマチュア（金銭的・物質的な呪縛とは無縁の純粋にスポーツを愛好する人々）の世界を維持するかということであった。しかし、そんな時代にあつて、クーベルタンがスポーツの国際化とそれによるスポーツの大衆化を真剣に考え、行動していたことは先見的である。

「人種、宗教、政治、性別、その他の理由に基づく国や個人に対する差別はいかなる形であれオリンピック・ムーブメントに属する事とは相容れない。」（オリンピズムの根本原則5）

「100名の者がその肉体を鍛えるには、50名がスポーツをする必要がある。50名がスポーツをするには、20名が専門化する必要がある。20名が専門化するには、5名が優れた高い技能の持ち主であることが必要である。」（クーベルタン、p.203）

このクーベルタンの言葉は、彼がすでにスポーツ・フォー・オール（みんなのスポーツ）の発想をもっていたことを示している。このオールとは、人種、宗教、政治、経済による差別のないすべての人を指している。その後、このオールの中に女性や障害者など多様な人々が含まれるようになり、その範囲は時代と共に拡大している。「5名（の）優れた高い技能の持ち主」とはオリンピック選手のような人を指していると思われる。オリンピック選手は人々の憧れであり、人々の手本として高い運動技能を身につけているだけでなく、精神的、知的にも優れていることが求められる。古代ギリシア人が理想としたカロカガティア（鍛え上げられた美しい身体と高い道徳性を兼ね備えた人間）を体現した人としてである。

### (4) 競技的信仰

古代において、鍛錬によって競技者として卓越することは神に近づくことでもあった。勝利は神が授けるものと考えられていたので、勝利者はゼ

ウスの大祭壇の許に導かれた。八百長などの不正行為が発覚すると、厳しく罰せられた。

クーベルタンは、オリンピックの復興に際して、まず、この競技者の信仰心を呼び覚まそうとした(クーベルタン、p.202)。競技者としてより高い存在になることを目指して努力を重ねる姿は神聖である。神に選ばれる存在になるためには、偽りがあってはならない。フェアプレーの精神は、自らの利害(勝敗)を顧みずに無条件に行う正しさであり他者への配慮に基づく公平さである。

オリンピックの標語「より速く、より高く、より強く」(Citius, Altius, Fortius)は、単に競技力の向上を表現しているのではない。より高いパフォーマンスを通して、人間の完成に向けて永久に励む(努力する)ことを意味している。

クーベルタンによれば、オリンピック競技大会で行われる式典の内容は、すべてこの競技的信仰心から発している(クーベルタン、p.202)。

「スポーツを行なうことは人権の一つである。各個人はスポーツを行う機会を与えられなければならない。そのような機会は、友情、連帯そしてフェアプレーの精神に基づく相互理解が必須であるオリンピック精神に則り、そしていかなる種類の差別もなく、与えられるべきである。スポーツの組織、管理、運営は独立したスポーツ団体によって監督されなければならない。」(オリンピズムの根本原則4)

スポーツをする機会はすべての人に保証されなければならないが、スポーツそれ自体が善であるわけではなく、正しく監督され、導かれなければならない。

オリンピックが生んだ有名な言葉がある。「参加することに意義がある」別名「参加の哲学」とも言われる。1908年第4回ロンドン大会の綱引き競技にかかわって、タルボット主教が競技の棄権を戒めた言葉である。この言葉をクーベルタンが次のように言い換えた。「オリンピックで重要なことは勝つことではなく参加することである。人生で大切なことは、成功することではなく、よ

く闘ったということである。」このクーベルタンの演説は、結果よりも過程を重視した考え方を示し、いかなる状況下にあっても最善を尽くすことの大切さを説いている。

この「参加の哲学」は、言葉がひとり歩きをして、しばしば誤解されて使われることがあるように思う。「参加することに意義があるのだから、結果はどうあれ、とにかく参加すればいいのだ」というのは、真意ではない。「参加する」ということは、すなわち最善を尽くすことを意味している。そこでは執拗なまでに勝利に執着する。それゆえ、そこに人間が絶えず努力を積み重ね、ありとあらゆる力を振り絞って闘う営みがあり、自己の限界への挑戦がある。それこそが価値である。勝敗という結果は、自らが下すことはできない。人間が自らに課することができるのは結果ではなく、その長い準備期間も含めた闘いぶりなのである。このような「参加」が人間を真の成長へと導く。

クーベルタンの次の言葉は、このことをよく表している。「成功は目的ではない。しかし、より高きものを目指すための一つの方法である。」クーベルタンにとって、スポーツとはこよなく愛すべきものであったが、人間にとっての目的ではなく、人間が自己の完成を求めて成長するために重要なもので、他人との競争は内的な成長のための手段であるといえる。

### 3. オリンピック競技大会の位置づけ

上記のようなオリンピズムを現実の世の中に具現するために、IOCや関係機関、人々が行っている様々な活動をオリンピック・ムーブメント(Olympic Movement)という。そして、オリンピック・ムーブメントの中の代表的な活動の一つがオリンピック競技大会である。すなわち、オリンピック競技大会は人類がオリンピズムを目指す一つの試みとして位置づけられている。

「オリンピック・ムーブメントは、オリンピズムの諸価値に依って生きようとする全ての個人や



団体による、IOCの最高権威のもとで行われる、計画され組織された普遍的かつ恒久的な活動である。それは五大陸にまたがるものである。またそれは世界中の競技者を一堂に集めて開催される偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会で頂点に達する。そのシンボルは互いに交わる五輪である。」(オリンピズムの根本原則3)

近代オリンピックの歩みは2世紀目に入り、古代オリンピックに比較すると1/10程度の時間の経過にすぎない。しかし、時代は急速に変化している。近代オリンピックの誕生もまた時代の産物である。クーベルタンがオリンピズムを敢えて定義しなかったのは、人々がいつの時代にあっても、その時代のオリンピズムを問い続けていくことを求めたからだといわれている。したがって、オリンピック競技大会のあり方も、時代とともに変わりゆく。いつの時代も変わらないオリンピズムの普遍的な価値は、オリンピックが、どのような形であれ、人間の成長に重要な貢献をするという教育的価値である(田原、1993)。

#### 4. オリンピズムを生きる

オリンピズムの普及と研究のための国際機関として、国際オリンピック・アカデミー(International Olympic Academy, 1961年設立)がある。このIOAで長年にわたり学院長を務めたオットー・シミチェック(Otto Szymiczek)の講義録(1962~1987年)とシミチェック本人へのインタビューから、IOAの最大公約数的な見解として、オリンピズムの内容を以下のようにまとめることができる(田原、1988)。

オリンピズムは単一の価値ではなく、次に示す6つの価値を含んでいる。

- ①教育的価値：人間が調和的に発達することによって到達する、完全な人間の創造を目指し、選手だけではなく、一般の人々にまでその枠を広げ、より良い市民の創造を目標とする。これはオリンピック・ムーブメントおよびオリンピック競技大会を通して実現されるべき

最終目標である。

- ②平和的価値：「世界平和」「国際親善」「相互理解」「オリンピック・ムーブメントとIOCの独立」をキーワードとする。ここでの「国際親善」や「相互理解」は選手だけで行われるものではなく、大会役員、審判員、観衆なども含まれ、オリンピズムはあらゆる人々に行き渡る理想である。
- ③達成価値：卓越することを願望し、努力を重ね、競争することでより高め合うという「競争の原則」を意味する。この価値は、スポーツの一つの特性を示しているが、この価値を重視しすぎると勝利至上主義に陥る恐れがある。ドーピングもその弊害の1つである。
- ④倫理的価値：「フェアプレー」「機会均等」「現行ルールの遵守」などが含まれる。かつてはこの価値の中で「アマチュアリズム」が重視されていた。
- ⑤芸術的価値：優れた芸術への興味を刺激することにより、スポーツだけではなく、よりバランスのとれた生活に貢献し、人間性を豊かにする。大会における芸術プログラム等がその具体例である。
- ⑥宗教的価値：神聖さやより優れたもの、未知のものに憧れる、人間の純粋な精神性を意味する。この価値は古代オリンピックにおいて非常に重要な位置を占め、クーベルタンは特にこの価値を近代にも残そうとした。オリンピック競技大会における開会式や閉会式等のセレモニーは、この価値の象徴である。

近年のオリンピック・ムーブメントの動向に鑑みれば、これらの6つの価値のほかに、「環境」に関する価値を含めるべきかもしれない。1990年代に入って、IOCは「スポーツ」「文化」に加えて「環境」を新たな柱としてムーブメントを展開しているからである。

以上のように、オリンピズムは複数の価値をもち、その根幹に「教育的価値」すなわち「人間教育」の理想がある。したがって、オリンピック競

技大会で金メダルをとることは、オリンピズムにおける目標にこそなれ、目的ではない。オリンピズムが問うのは、誰が金メダルをとったかではなく、メダルを争うような競技を行えるようになった結果、どのような人間になったかである。オリンピズムは結果を重視するのではなく、結果を求めらる中で得られる過程を重視する考え方である。非常に崇高であると同時に、日常的な、誰にでもあてはまる身近な理想である。そのため、普遍的な「人生哲学」であるといわれている。これらの諸価値を心に刻み、スポーツの場面に限らず、日常生活において実践していくことが求められている。

「オリンピズムは人生哲学であり、肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すものである。スポーツを文化や教育と融合させるオリンピズムが求めるものは、努力のうちに見出される喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である。」(オリンピズムの根本原則1)

## おわりに

オリンピック競技大会というヨーロッパから発信されたこのムーブメントが世界的な拡がりを見せた背景には、20世紀の帝国主義的植民地化という時代と無関係ではなかった。今日でもなお、オリンピックのヨーロッパ中心主義が批判の対象になることがある。

教育者であり柔道の創始者として知られる嘉納治五郎は、クーベルタンのオリンピズムに共感して、IOC委員就任の要請を受けたと伝えられている。嘉納の「精力善用」「自他共栄」という思想は確かにオリンピズムと共通する。しかし、嘉納はオリンピズムにただ迎合するのではなく、武道からオリンピックの世界に積極的なはたらきかけ

をしようと考えていたという。それがどのような形でどこまで実現したのかは明らかにされていない。

オリンピックが真の意味で世界のスポーツの祭典となるためには、欧米以外の文化圏から世界に通用する価値がオリンピズムに導入されること、そして近代という時代性からの脱皮が求められるだろう。

日本は過去に3回のオリンピック競技大会を開催し、欧米以外の国にあってオリンピックと深いかかわりをもってきた数少ない国である。オリンピックは日本とそこに住むわたしたちに何をもたらし、わたしたちはオリンピック・ムーブメントにどのような貢献をしてきたのか。こうしたレガシー（遺産）を明らかにすることによって、多くの示唆が得られるであろう。この国が培ってきた教育の経験知は、より発展的に世界のオリンピック・ムーブメントと相互に響き合うことができるであろう。そのためには、義務教育の段階から子どもたちがオリンピズムのエッセンスを理解し、行動できるようになる教育を推進していくことが重要である。

## 引用・参考文献

- 日本オリンピック委員会 (2004) オリンピック憲章.  
 桜井万里子・橋場弦編 (2004) 古代オリンピック. 岩波書店  
 清水重勇 (1989) クーベルタン その虚像と実像-2-. 体育の科学, Vol.39, No.2: 153-160.  
 田原淳子 (1993) オリンピズムに関するIOAの見解. 体育史専門分科会シンポジウム報告「日本におけるオリンピック運動の歴史」日本体育学会体育史専門分科会編, 体育史研究10: 69-72.  
 田原淳子 (1988) オリンピック理念の展開1962~1987—O.シミチェックの論文を中心として—. 横浜国立大学大学院教育学研究科修士論文.  
 ジョン・J・マカルーン (1988) オリンピックと近代評伝クーベルタン. 平凡社  
 ピエール・ド・クーベルタン (1976) カール・ディーム編, 大島鎌吉訳, オリンピックの回想. ベースボール・マガジン社